

巻頭言

鍵を探せ

真っ暗な広い野原の真ん中に1本の街路灯が煌々と輝いていた。その下で、一人の若者が何かを探している様子であった。その若者に近づいて聞いてみた。「何を探しているのですか」。すると若者は答えた。「鍵を落としてしまったのです。鍵を探しているのですが、なかなか見つからないのです」。「その鍵はどこでなくしたのですか?」と聞くと、若者は暗闇を指して答えた「あちらの方です」。「向こうでなくしたのに、なんで街灯の下を探しているのですか」。「向こうは真っ暗で、とても鍵を見つけられそうにないからです」。

これは今から数十年前、私が大学院生の時に参加した生化学夏の学校(現在は生命科学夏の学校)で講師(誰かは失念した)から聞いた話である。もちろん、鍵は研究上の発見のことで、探しやすい場所だけ探しては大事な発見はできないという意味であったと思う。しかし今考えると、もし鍵を落とした場所がわかって、そこを探したとしても、真っ暗な中では鍵はきっと見つからないに違い無い。だいたい、鍵(発見しなければならぬこと)がどんなものかすらわからない場合が大部分だろうし、鍵の落とした場所(どこを研究すればよいか)もわからない場合の方が多いであろう。仮に、鍵を落とした場所がわかっているのであれば、懐中電灯(研究方法)を発明すべきだと思う。しかし、おそらく懐中電灯の発明は大発明で、そう簡単でできることではないに違いない。

結局のところ、手探りで真っ暗闇の中を、何を探しているのかもわからずに苦勞する羽目になる。せめてきれいな花でも見つければよいのだが、真っ暗闇ではそれもわからない。雑草でも石でも見つけて喜ぶしかない。

もし、新たに街灯が設置されるとわかれば、新しい街灯の下の光の当たる場所で美しい花でも探したいものである。そんなこともめったになさそうだが、ただ、草も生えず石も落ちていない街灯の下でうろろろすることだけはしたくないものだと思っている。

山岸 明彦(東京薬科大学 生命科学部)